



语 言 学 论 丛

关于与现代日语时间表达 相关副词的研究

——以表示事态存在副词和事件发生副词为中心

彭玉全 著



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

本书获得 2011 年度云南大学哲学社会科学基金项目批准号: SWU11310)

关于与现代日语时间表达 相关副词的研究

——以表示事态存在副词和事件发生副词为中心

彭玉全 著



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

关于与现代日语时间表达相关副词的研究:以表示事态存在副词和事件发生副词为中心/彭玉全著. —北京:北京大学出版社,2012.10
(语言学论丛)

ISBN 978-7-301-21407-7

I. ①关… II. ①彭… III. ①日语—态(语法)—副词—研究
IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 240793 号

书 名: 关于与现代日语时间表达相关副词的研究

——以表示事态存在副词和事件发生副词为中心

著作责任者: 彭玉全 著

组稿编辑: 白 渤

责任编辑: 肖凤超

标准书号: ISBN 978-7-301-21407-7/H · 3159

出版发行: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区成府路 205 号 100871

网 址: <http://www.pup.cn>

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62759634

出版部 62754962

电子信箱: xfc203@126.com

印 刷 者: 三河市欣欣印刷有限公司

经 销 者: 新华书店

890 毫米×1240 毫米 A5 7.875 印张 249 千字

2012 年 10 月第 1 版 2012 年 10 月第 1 次印刷

定 价: 28.00 元

未经许可,不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有,侵权必究

举报电话: (010)62752024 电子信箱: fd@pup.pku.edu.cn

序 一

日本語研究における品詞論の中心は、名詞や動詞・形容詞、助詞・助動詞に関する研究である。伝統的な日本語の品詞区分は、体言（名詞）と用言（動詞・形容詞）と付属語（助詞・助動詞）を区別するものであり、体・用・相の三分類や体用と詞辞の十字分類を取り入れたところで、動詞と形容詞の区分や助詞と助動詞の区分が加わるに過ぎない。構文論においても、係り結びや格関係、主語・主題の問題にしても、自他やテンス・アスペクトなどの述語に関わる問題にしても、体言と用言、付属語の組み合わせに関わる内容が研究が中心である。

副詞や副詞的修飾語は、副次的な品詞であり、文の成分である。いわゆる学校文法では、名詞と副詞は、活用しない自立語を「主語になる」か「専ら連用修飾語になる」という機能の面から対等に区分したもののように見えるが、実際は、副詞は、接続詞や感動詞などとともに、活用しない自立語で名詞に入れられないものを、西洋流の品詞にならってどうにか区分した、二次的な処理による品詞である。副詞的修飾語も同様に、立場によって主語以外のもの、主語と目的語以外のもの、格成分以外のものなど、幅はあるものの、主要な成分以外の連用的な成分をとりまとめたものなのである。

こうした副次的なカテゴリーである副詞や副詞的修飾語の研究には、主要なカテゴリーに関する研究にはない難しさがある。副詞だけ、副詞的修飾語だけを研究するようなあり方は成立せず、常に、名詞論や動詞論、格関係論など、主要なカテゴリーの研究成果を踏まえて、自らの立ち位置や対象の範囲を確認し調整し続けなければならない。副詞や副詞的修飾語の研究を志す者は、文法のジェネラリストであることが期待されるのである。事実、山田孝雄、渡辺実、北原保雄、仁田義雄など、副詞・副詞的修飾語の研究を推し進めた先人は、いずれも文法のジェネラリストであった。

彭玉全氏も、新進の副詞・副詞的修飾語研究者として、名乗りをあ

げた。

彭氏は、日本語研究者・日本語教師として中国重慶の西南大学で職を奉じていたが、さらに研究を深めるため、日本への留学を志し、東京外国語大学および筑波大学での研鑽を経て、2010年3月に筑波大学より、博士（言語学）の学位を授与された。

彭氏の学位論文は、アスペクトの観点から副詞的修飾語を分類するとともに、特に、頻度や事態の起こり方を表す副詞的修飾語について、コーパス調査による多数の実例をもとに分析を進め、的確な分類と記述を行った。コンピューターによるコーパス調査が容易に出来る現在でも、形態的な統一性も構文的な出現位置も特定しにくい副詞や副詞的修飾語に関しては、目視による確認が必須であること、必ずしも頻度が多くないこともあり、多量のデータを集めることは容易ではない。氏の研究が一つ一つ確認し、用法を特定していった数千に及ぶ実例をもとにしたものであったことに、私を含めて査読者全員が驚嘆した。

副詞的修飾語の研究は、述語との関係をもとに理論的な区分を立てていかなければならないが、ともすると、具体性に欠ける概念既定をやたらと重ねることになる。一方、副詞の研究は、個別の語彙的意味にとらわれやすく、類語の対照研究は出来ても、カテゴリーの研究に行き着かないことが多い。大まかすぎる副詞的修飾語の研究になるか、個別的すぎる副詞の研究になるか、どちらかに偏ってしまうのだが、彭氏は、カテゴリーに関わる論と個別の用法論との両立を意識して、一定の成果をあげている。

全体の理論性を保持しつつ、個々の語の語彙的な意味を尊重する。言葉にするのは容易だが実践は難しい。この論文は、文法のジェネラリストへの道に踏み下ろした、最初の一步である。

矢澤 真人

2012年3月

序 二

西南大学日语系彭玉全老师的博士学位论文『現代日本語の時間表現に関する副詞の研究』即将付梓，玉全嘱我为其大作撰写序言，因已有其导师矢泽真人先生的序言赫然卷首，我这个外人再啰嗦难免狗尾续貂之嫌，因此一度婉辞，但玉全言辞恳切，加之有同宗之谊，却之不恭，遂勉为此篇。

与玉全交往不过数载，但他给我留下的印象还是颇深的。首先他性格内向，甚至有些木讷，但绝不浮夸，这是我对他抱有好感的直接原因。最主要的是他在筑波大学留学期间，师从矢泽真人教授，受到了良好的学术训练，打下了扎实的理论基础，治学态度严谨，中规中矩。特别是他的博士论文是研究现代日语中的时间副词的，这与我曾经指导过的博士研究生孙佳音的博士论文题目非常接近（孙现为北京语言大学日语系副教授，其博士论文《现代日语时间副词研究》已于2010年5月由中国社会科学出版社出版），所以格外引起我的关注。

众所周知，时间副词是副词的一个次类，它与典型的副词（情状副词、程度副词）不同，是对谓语所表示的事件（动作、变化等）从时间上加以限定的。在我看来，玉全的博士论文有如下几个特点：第一，注重对时间副词与谓语动词形态的关系的描写，特别注意前者对于后者的限定性；第二，注重对多个时间副词共现时的语序的描写；第三，注重对时间副词与句子类型的关系的描写；第四，注重计量分析，运用语料库统计出数据，搞清不同的时间副词在“量”上的不同特点，定性研究与定量研究相结合，做到了持之有据，因此有较强的说服力。玉全的研究不仅在理论上进行了有益的探索，而且其成果对于日语教学也不乏指导意义。玉全的这本专著与孙佳音的专著各具千秋，相得益彰。

我衷心地希望玉全今后能够继续这方面的研究，对日语的时间副词进行更加全面、更加系统、更加细致的考察，以对我国日语研究做出更大的贡献。我相信玉全是有能力做到的。是为序。

彭广陆

于京西寓所牛步居

2012年3月24日

目 次

第1章 序論	1
1.1 はじめに	1
1.2 本書の目的と意義	6
1.3 本書の構成	7
第2章 先行研究の概観	9
2.1 事態存在のありかたを表す副詞に関わる先行研究	9
2.2 出来事生起のありかたを表す副詞に関わる先行研究	16
2.3 先行研究の問題点と本書の課題	22
第3章 事態存在のありかたを表す副詞	28
3.1 事態存在のありかたを表す副詞について	28
3.2 「何度も」が表す反復の意味	30
3.3 事態反復と動作連続	48
3.4 頻度の副詞の修飾対象	68
3.5 頻度の副詞と文末表現との共起	88
3.6 事態の時間的存在と超時間的存在	107
3.7 本章のまとめ	119
第4章 出来事生起のありかたを表す副詞	121
4.1 出来事生起のありかたを表す副詞の外延	121
4.2 出来事生起のありかたを表す副詞と述語動詞 のアスペクト形式との共起について	132
4.3 出来事生起のありかたを表す副詞と文末表現との共起	145
4.4 出来事生起のありかたを表す副詞の分類	157
4.5 本章のまとめ	161
第5章 時の状況成分・頻度の副詞・出来事生起 のありかたを表す副詞の共起と語順	162
5.1 時の状況成分と頻度の副詞との共起と語順について	162

5.2	時の状況成分と繰り返し期間の副詞との共起と語順	192
5.3	頻度の副詞と出来事生起のありかたを表す副詞 との語順について	199
5.4	本章のまとめ	206
第6章	副詞と動詞句のアスペクト的意味との関わり	207
6.1	はじめに	207
6.2	副詞的成分による動詞のアスペクト的意味の移行現象	208
6.3	本章のまとめ	216
第7章	終章	218
7.1	各章の概要	218
7.2	副詞とアスペクト、モダリティ、語順	220
7.3	問題点と今後の課題	222
附録	アンケート調査用紙	224
参考文献		232
用例出典		240
后记		241

第1章 序論

序論では、本研究の研究対象である事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞を簡略に説明して、本研究で扱う課題、目的と意義を示す。

1.1 はじめに

1.1.1 時間表現に関わる副詞とは

現代日本語の時間表現には、テンスの表現とアスペクトの表現がある。テンス¹とは、時間軸において事態が占める位置を発話時点或いは基準時点との時間関係（以前<過去>、同時<現在>、以後<未来>）という観点から表す文法カテゴリーである。アスペクト²とは、出来事がどのような局面にあるかを表す文法カテゴリーである。現代日本語にはテンス・アスペクトという時間表現に関わる副詞がある。例えば、

- (1) かつて九州は一割経済圏と呼ばれた³。（『朝日新聞』1985年2月11日）
- (2) 「総督府は最も公明正大な方法で処分するつもりで、目下研究を急いでいる」（『人民は弱し、官吏は強し』）
- (3) 「もうすぐ来るだろう」（『点と線』）

(1)における「かつて」は過去のテンスと、(2)における「目下」は

1 町田健(1989)、工藤真由美(1995)、庵功雄(2001)を参照。

2 庵功雄(2001)を参照。工藤真由美(1995)はこのような出来事がどのような局面にあるかという定義ではなく、「時間的限界づけの有無」というようなアスペクトの定義をくだしている。ここでは、庵(2001)の立場によっておく。

3 本書では、用例や図表の番号を章ごとに付す。例文は一文を基本とするが、文脈を明確にするため長く引用することもある。副詞或いは副詞的成分には太字と下線、述語動詞句には波線の下線を付す。括弧内に出典を明記する。出典については論文末「用例出典」参照。また、本書では、頁ごとに脚注番号を付す。

現在のテンスと、(3)における「もうすぐ」は、未来のテンスとそれぞれ呼応する。これらの副詞は発話時を基準にして、事態が行われる時点の時間軸上の位置づけを表し、文のテンスと関わっている。これらは、テンスの副詞と呼ばれている。

それに対して、次のような副詞はアスペクトと関わっている。

- (4) 私がそれを右手に受けたまましばらくの間バフィーの横顔を見つめていると、突然彼女の鼻と口から白い煙が大量に吐き出された。(『若き数学者のアメリカ』)
- (5) 静は病院へ運ばれて間もなく死んだ。(『太郎物語』)
- (6) 彼女の熱が徐々に下がっている。(森山卓郎1984, p. 70)
- (7) 居留区の船着場でも、スルタンの約束を信じないで逃げると決めたジェノヴァ人やその家族が、次々と船に乗りこんでいた。(『コンスタンティノーブルの陥落』)
- (8) 東京の両親からはしばしば手紙が届いた。(『若き数学者のアメリカ』)
- (9) その後開戦までの二年三カ月の間に、彼は艦隊から出張のかたちでは何度も東京へ出て来ている。(『山本五十六』)

(4)における「突然」は出来事¹生起の「突発性」というありかたを表し、(5)における「間もなく」は出来事生起の時間的なありかたを表す。これらを出来事生起のありかたを表す副詞と呼ぶことにする。

(6)における「徐々に」は事態²の持続(継続)を表す。それによって、動詞句「熱が下がっている」のアスペクト的意味は「動作継続」になり、「徐々に」がなければ、「結果残存」というアスペクトの意味になる。(7)における「次々と」は事態の持続過程において「動作連続」というありかたを表し、「船に乗りこんでいた」のアスペクト的意味は、「動作継続」という読みになる。「次々と」のような副

1 本書での「出来事」は、動き(動作と変化を含む)を指す。

2 本書での「事態」は、動き(動作と変化を含む)と状態を指す。つまり、言表事態のことである。「出来事」と「事態」とは、状態を含むかどうかという点に異なっている。

詞があれば、動詞句のアスペクトの意味は「結果残存」という読みを制限する。¹「徐々に」「次々と」は、事態の過程のありかたを表す副詞と呼ぶことにする。

(8)における「しばしば」は、事態「手紙が届く」が時間軸上において繰り返し存在する度合を表し、即ち、事態が時間軸上においてどれだけ存在するかの多寡を表し、従来、頻度の副詞²と呼ばれる。(9)における「何度も」は、事態が時間軸上における存在の回数を表し、度数の副詞と呼ばれる。「しばしば」「何度も」のような副詞は、いずれも時間軸上において事態の存在のありかたを表し、**事態存在のありかたを表す副詞**と呼ぶことにする。

(4)～(9)における「突然」「間もなく」「徐々に」「次々と」「しばしば」「何度も」といった副詞は、アスペクトと関わっているものである。

以上述べた時間表現(テンス・アスペクト)に関わる副詞は、先行研究では「時の副詞」(森重1956, 森重1975, 川端1964a, 川端1964b)か、「時間関係の副詞」(仁田2002)と呼ばれている。これらは、品詞としては副詞と呼ばれるが、文において文の成分として用いられる場合、修飾成分と呼ぶべきであるが、本書では、便宜のために、これらはいずれも副詞と呼ぶことにする。

1.1.2 事態存在のありかたを表す副詞

事態の存在には、出来事(動き)の存在やモノの存在、状態の存在がある。その中には、時間と関わっている事態の存在と、時間と関わっていない事態の存在がある。

事態が時間軸上において存在する多寡や回数を表す頻度の副詞や度数の副詞は、事態の時間的存在のありかたを表す副詞である。例えば、

(10) 賞与式には欠くべからざる喉をきかせるおじさんが、いつもにこにこと彼女を迎えてくれる。(『検家の人びと』)

(11) プーチン大統領は米国民への連帯の意思を表明、ブッシュ大

1 矢澤真人(2007, p.74)を参照。

2 森重敏(1956)、川端善明(1964a, 1964b)、仁田義雄(2002)を参照。

統領らと頻繁に連絡を取っている。(『毎日新聞』2001年9月15日)

- (12) 「(略) 佐川が時々訪ねてきて慰めてくれるが、もう結婚のことは佐川も諦めたらしい…」(『塩狩』)
- (13) 僕のような非喫煙者は、日本ではしょっちゅう紫煙に苦しめられている。(『毎日新聞』2002年2月7日)
- (14) 歩けるようになるとわたしも珠子も、しばしば智広を外へ連れ出しました。(『エディプスの恋人』)
- (15) 二年前の冬、私は長野から大場の話聞かせてもらうため何度も帝拳ジムに通った。(『一瞬の夏』)
- (16) 「でも面白いよ。『剃刀の刃』なんて三回も読んだ。あれはたいした小説じゃないけど読ませる。逆よりずっと良い」(『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

(10)～(14)における「いつも」「頻繁に」「時々」「しょっちゅう」「しばしば」は、事態の存在する多寡を表し、従来頻度の副詞と呼ばれる。また、(15)(16)における「何度も」「三回」は、事態の存在する回数を表し、度数の副詞と呼ばれる。これらは、いずれも事態が時間軸上に存在するありかたを表すものである。このような存在は、**事態の時間的存在**と呼ぶことにする。

これに対して、次の(17)(18)(19)における「普通」「通常」「一般的に」といった副詞は、事態の時間軸上における存在ではなく、抽象化した非現実世界における事態の集合について、当該事態が多いか、そうでない事態が多いかということを表す。このような時間を捨象した非現実世界における事態の存在を**事態の超時間的存在**と呼ぶ。本書では、超時間的に存在する事態の多寡を表す副詞は、**超時間的存在副詞**¹と呼ぶことにする。

- (17) 「親は普通子供より先に死ぬ。」(『類語大辞典』柴田武山田進編 講談社 2002)

1 矢澤真人(2000, 2007)では、このような副詞は傾向性の修飾成分と呼ばれ、傾向性の修飾成分と頻度の修飾成分は「事態存在相修飾成分」としてまとめられている。

- (18) 通常、大学を解雇される場合は、研究者としての能力が理由とされる。(『若き数学者のアメリカ』)
- (19) 一般的に、アメリカの主要大学では、教授の給与は主に研究業績によって左右される。(『若き数学者のアメリカ』)

以上述べた事態の時間的存在のありかたを表す副詞と超時間的存在副詞は、いずれも事態の存在のありかたを表すので、本研究では、これらを事態存在のありかたを表す副詞としてまとめる。

1.1.3. 出来事生起のありかたを表す副詞

出来事がどのように起こるか、つまり出来事生起のありかたには、次の二つの意味がある。一つは、出来事の生起が「突発性」を持つかどうかという心情的なありかたである。もう一つは、出来事の生起が時間的に早いか遅いかという時間的なありかたである。前者には、次のようなものがある。

- (20) 太郎はそう言うと、突然、「オヤ」と呟いた。(『太郎物語』)
- (21) 隣の部屋で急に良平が声をあげて泣き出した。(『華岡青洲の妻』)
- (22) 庄吾は持っていた杯を、いきなり、おれんに投げつけた。(『路傍の石』)
- (23) そのうちに、じっと立っていた隊長はにわかにびくりと身をうごかしました。(『ビルマの豎琴』)

「突然」「急に」「いきなり」「にわかに」などの副詞は、出来事の生起の「突発性」を表すものである。このような副詞は、矢澤(2000, 2007)では生起相修飾成分と呼ばれ、仁田(2002)では「僅少所要型」の起動への時間量を表す副詞¹と呼ばれる。後者は、次のようなものが挙げられる。

- (24) 私は未来のことを考えるのがいやだったので、直ちに拇指を印

1 仁田(2002, p.247)では、<僅少所要型>とは、「事態の取り掛かり・起動までに要する時間量がきわめてわずかであることを表すものである。」と規定されている。

肉に染めて擦した。(『金閣寺』)

- (25) 私が訊ねると、内藤は即座に首を振った。(『一瞬の夏』)
- (26) 「間もなく女中が帰って来る。それまでは、これでもやってくれ」(『剣客商売』)
- (27) 老教授はしばらく徹吉の仕種を眺めていたが、やがて独りごとのように呟いた。(『楡家の人びと』)
- (28) だれひとり先生にあいさつをするゆとりもないらしいなかを、先生もまた、道にうちあげられた石をよけながら、自転車をおしてやっと学校にたどりついた。(『二十四の瞳』)
- (29) その夜のガンルームは湧き立っていた。ついに英空母ハーミスをやった。(『楡家の人びと』)

「直ちに」「即座に」「間もなく」「やがて」「やっと」「ついに」のような副詞は、出来事生起の時間的ありかたを表すものである。このような副詞は、発話時または前の事態より当該の出来事の発生・生起までの時間幅を表す。出来事生起のありかたを表す副詞の修飾対象は、いずれも出来事であり、状態を修飾できない。¹この点は、事態存在のありかたを表す副詞と違っている。

1.2 本書の目的と意義

これまでの情態副詞に関わる研究は、動詞のアスペクト的側面に注目して行われたために、結果副詞やいわゆる継続相副詞が中心であった。結果副詞や継続相副詞は、いずれも事柄の内部の様子を表すものである。これに対し、本書で扱う事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞は、事柄の外のこと、つまり、事柄の頻度を表すか、事柄の起こりかたを表すかというものである。継続相副詞や結果副詞の「ゆっくり」や「赤く」などが動き内部に関わる様子を表すのに対して、事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞は、事柄全体のありかたを表すのである。しかも、事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副

1 例えば、「?今日突然寒い。」「?間もなく高い。」。この点は、本書の4.1を参照。

詞はしばしば時点詞と関わって、時点詞との交替が頻繁に起こるという点でも、ほかの情態副詞（つまり、結果副詞や継続相副詞）と違っている。事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞は、ひとまとまり性のある動きがどのように起こるか、どのようにで存在するかを表し、テンスと強く関わっている。本研究で事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞をひとまとめに扱う意義は、まさにこの点にある。

＜本書の目的＞

事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞について、副詞の修飾対象である述語動詞との修飾関係、主に述語動詞のアスペクトとモダリティとの関係から、副詞の性質・機能を捉えること。

＜本書の意義＞

従来の情態副詞研究は、語彙的意味だけから副詞の用法を記述することや直感的な意味の基準によって分類することが多かった。本書では、コーパス用例調査とアンケート調査など考察を行うことにより、副詞の性質・機能をより客観的に捉えていく。本書の考察した結果は、日本語研究に役立つだけでなく、日本語教育の現場で現代日本語の副詞の習得に活用することが期待されるものである。

本書は、『分類語彙表』（国立国語研究所1997）と仁田（2002）を参考にしながら、事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞のうち使用率が高いものをサンプルとして、コーパスから用例を集める。これらについて必要に応じてアンケート調査を行う。コーパス調査とアンケート調査の結果を考察し、事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞の性質・機能について検討を加える。

1.3 本書の構成

本書は、序論としての第1章、本論である第2章～第6章、結論であ

る第7章からなっている。第2章では、先行研究を概観する。第3章では、事態存在のありかたを表す副詞の性質を検討する。第4章では、出来事生起のありかたを表す副詞の性質を検討する。第5章では、時の状況成分と頻度の副詞との共起と語順、頻度の副詞と出来事生起のありかたを表す副詞との語順について考察する。第6章では、副詞的成分と動詞のアスペクトの意味との関わりを考察する。最後に、第7章では、各章における考察をまとめ、残された問題点と今後の課題を整理する。

第2章 先行研究の概観

本章では、本研究の対象となる事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞についての先行研究を概観し、先行研究の問題点を検討する。

2.1 事態存在のありかたを表す副詞に関わる先行研究

事態存在のありかたを表す副詞に関する先行研究は、研究の立場からみれば、大きく分けて次の三つに分けることができる。

(1)

①語彙的意味の研究：

語彙的意味から副詞を分類して、それぞれ用法を記述する研究；

②機能的研究：

副詞的修飾成分と述語動詞との修飾関係、つまり、副詞的修飾成分の修飾対象、文における位置、動詞のアスペクトの意味への制限などから、同じ階層における副詞的修飾成分の素性を記述する研究；

③個別的研究：

個別の副詞の語彙的意味・用法を記述する研究；

①語彙的意味の研究には、仁田（2002）があげられる。②機能的研究には、矢澤（1983, 1986, 1987, 2000, 2007など）があげられる。③個別的研究には、萩原（2004, 2005）、森川（2008）、八尾（2007, 2009）があげられる。以下では、これらの先行研究について検討する。

2.1.1 語彙的意味の研究：仁田義雄（2002）

本研究の研究対象となる事態存在のありかたを表す副詞については、仁田（2002）は、次のようなものが含まれていると指摘している。